

猫 蓑 通 信

第 107号

平成 29年
(2017年)

5月 31日発行
(年 4回発行)

連句文芸のこれから

青木秀樹

私事になりますが、去る三月十二日(日)の一般社団法人日本連句協会総会において、会長に選任されました。前任の白杵游児氏が満八十八歳になられたことで後事を託され、やむを得ないこととしてお受けしました。猫蓑会は一時より会員数が減っていますが、依然相対的に多くの会員を擁しており、その役員として、連句界全体の発展に微力ながらも尽くす責任があると考えてお引き受けした次第です。

東明雅先生は連句協会設立時に暉峻康隆先生などと共に顧問に就かれていました。しかし、一部幹部と考え方が合わず退任なさいました。その証左として残っているのが「猫蓑作品集」です。猫蓑会独自に優れた捌き手を育成し、優れた連句作品を作ることを目的としていました。明雅先生はその後お考えを変えて、連句協会とは付かず離れずの距離感を保ちながら、故秋元正江さん、故式田和子さんを連句協会の評議員や常任理事に推され、少し時間が経ってから島村曉巴さんと私も役員に推されました。そ

うした関係は現在も継続しています。

現在の日本連句協会の抱える問題は多岐にわたっています。例えば、世の中の高齢化を上回る高齢化の進展や、連句指導者・リーダーの死去による会の解散への対処、より若い世代への働きかけ手法の開拓、連句過疎地での国民文化祭開催への対応、法人化しても変らない日本連句協会の存在感不足と認知度の低迷への対策、等々です。この中には日本連句協会が独自に行うべきことだけでなく、国民文化祭への対応など、各地の連句協会(支部を含む)やそれぞれの連句グループのお力を借りなければならぬ事項もあります。

さらに私個人として、日本全体の連句文芸の質がかなり低下していることを憂うこの頃です。怪しげな先輩に連句を習った、書物を読んだ連句を知り仲間を集めてグループを作った、という少人数の連句グループが増加している現状に、連句文芸は将来どうなってしまうのだろうかと心配しているのです。

幸いなことに私たちには東明雅先生から教えていただいたこと、それを次世代に語り継ぐ先輩の方々への存在、それに猫蓑会の式目がありま

す。式目というのは禁止事項を記したものではありません。こうすればうまく行く、こうしないとうまく行かないという連句の基本を教えるものです。式目が難しいのではなく、式目に自分勝手な解釈を加える、独善的な捌き手がいることが問題です。楽しくなければ連句じゃない、楽しいだけでは連句じゃない、との言葉を噛みしめながら、ご自分の習熟度に合わせて連句実作に励んでください。



●目次●

第百四十回猫蓑会例会(初懐紙) 作品

2	歌仙八巻
6	近・現代の連句界と連句誌(下) — 東明雅
9	「あがたの森」幻視 — 鈴木千恵子
11	有朋山狂連句会のこと — 木越 秀子
13	下蔭三吟(上) 歌仙二巻
13	増田龍雨 根津晋文 中村竹邨
15	温故知新18…シエイクスピアは文学していたか
16	事務局たより

寒梅の座

歌仙「御慶かな」

上月淳子

捌

雲海に機長の申す御慶かな 淳子

コックピットに初曆ゆれ 美恵

風景画ブルーと言へど種々ありて ひろみ

喫茶室では昆布茶大福 暁巳

窓越しに眺める月はまんまるに 泉子

秋夜にみかく眼鏡新し 恵

遅番の巡回の背の冷んやりと 恵

はつきり分る彼のためらひ 巳

通帳の額と比例の深き愛 み

すぐに忘れるサインコサイン 巳

「君の名は」岸恵子ではなかつたの 泉

富士登山してごみ拾ふ月 恵

取り敢へず息もつがずに生ビール み

右も左も区別つかない 泉

未来への夢様々に壁に貼り 巳

不協和音の利いた合唱 泉

花よ降れ横綱目指す関取に み

老人ホームのどちらかな午後 恵

鮎放流村落溢れかへるなり 全

次の世代に託すこの国 巳

山寺の千の階段駆け登る み

母おどろかす帰省子の髯 淳

タレントの売れどきいつも常ならず 巳

全週刊誌オードーをする 恵

居酒屋の噂忽ち拡まりぬ み

ひと目惚れした姐さんの凍 泉

生涯を使ひ走りに甘んじて 巳

いつもの犬がまた付いてくる 全

国境四輪馬車に月乗せん 泉

ツタンカーメン眠るやや寒 恵

ナウ地芝居にやつと主役を射止めたり 泉

幕間に食む塩のおむすび 巳

曇り拭き鏡につこり嬰の笑む 恵

何も起らぬ平日の昼 巳

花万朶百万石の城址に 淳

ふはり飛ばした五色風船 泉

連衆 山口美恵 江津ひろみ 島村暁巳

青木泉子

寒椿の座

歌仙「尾張から」

杉山壽子

捌

尾張から江戸へ三十年初懐紙 壽子

御慶を交はず和やかな顔 雅子

ひたすらに壺の形を焼き上げて 弘子

山並遠く煙たなびく 秀樹

林泉の入母屋に待つ月の宴 昭

児らは燥ぎてすすする新蕎麦 弘

秋祭準備万端整へる 全

都会から来たあのひとの事 雅

靴下の穴のかがりも愛らしく 壽

豊かな耳を舐めてみやうか 昭

何のこと分らぬままの外国語 樹

天地無用と函の印刷 全

汗しとどほると涙の優勝旗 雅

涼月の下あがる喚声 弘

仕事先へ家族呼び寄せ休暇とり 昭

デルデステムデンポケモンが出る 全

青春を過ごせし街よ花万朶 雅

名医の掌にはぬくもりのあり 樹

ナオこの空に屋敷立つ越の海 弘

萬葉歌碑をあふぐ旅びと 雅

防人のこの世に欲しといふニュース 樹

境界線は争ひの渦 弘

冬至湯のぐるり下向く柚子の帯 壽

咳ひとつして孤独なるとき 昭

あれこれと自分勝手な白日夢 弘

娘のうのう猫ものうのう 樹

長男に恋のてくだを習ふ父 雅

北海道へ足を伸ばして 昭

満月も天王星も壽 樹

あたたため酒のじわり効きくる 昭

ナウハロウイーンの仮装行列恐怖症 雅

クレジットカード全て解約 昭

嘘じやないきのふもけふも同じ服 弘

ああ疲れたと孫の口ぐせ 壽

花吹雪ご退位祝ふ民の掌に 昭

舞扇ふり蛇の応援 樹

連衆 武井雅子 市野沢弘子 青木秀樹 松原昭 執筆

寒紅の座
歌仙「生命かな」
武井敦子 捌

大寒の水の貫く生命かな 敦子
 香り馥郁庭の唐梅 良子
 犬小屋を暖色系に塗り上げて 転石
 ランドセル負ひ子供飛び出す 正夫
 月代の森深々と木の実落つ 久美
 新酒酌みつつ棋譜を揃へる 夫
 秋鯖を見事にさばく料理長 良
 ウ なんちやつて舞妓京に出没 美
 叡山の坊主にぞつこん惚れてをり 良
 土産物屋が客を呼びこみ 石
 アパートの螺旋階段とんとんと 石
 爆弾娘ここに隠れて 良
 偶像は破壊するべし夏の月 良
 ヒッチハイクで世界一周 夫
 撮影の猫百態を自慢する 夫
 漱石全集並ぶ古書店 石
 ジャムなめて先生仰ぐ花筵 石
 眼ばちくり黄砂降る時 良
 ナオ 陽炎の馬駆ける野に音のして 美
 ルビコン川を渡る下知来る 石
 さまざまな鼻クレオパトラの鼻も 美
 男はみんな私みてをり 石
 あるときはするりと逃げる雪女 良

平成二十九年一月二十二日
於 ホテルグランドヒル市ヶ谷

すつぽん鍋はぐつぐつと煮え 全
 刑事長が足取りさぐる山の宿 石
 からくり仕込むヴィオロンの胴 良
 爺と僕ジグソーパズルに夢中なり 夫
 海の方へと雲は流れて 夫
 芭蕉追ひ気比神宮に望の月 敦
 瓜ぼう止める手筈ととのへ 美
 ナウ この兎らに骨壺重し稲架の道 良
 なにげない絵が心地良き椅子 美
 週末はいつもぶらつく蚤の市 夫
 昭和の歌の響くラジカセ 石
 いつせいに花咲き初むる城の跡 敦
 スカーフとれば撫づる春風 美

連衆 本屋良子 林 転石 國司正夫
 斎藤久美

寒卵の座
歌仙「寒卵」
由井健 捌

東雲に鶏鳴残し寒卵 健
 外濠あたり春不遠 文伸
 画学生光の色を工夫して 未悠
 買ったばかりの洋書四五冊 アンズ
 寝ころんで月を待つ間の板庇 蓉子
 糸のころ草のみだれぬる庭 全
 今年酒外国人も蔵巡り 悠
 交差点では様々な恋 伸
 縞馬の縞柄にするベアルック ア

嫁は理系で私文系 全
 この頃は老々介護増ゆるとか 伸
 長い廊下にざしき童子が 悠
 月涼しタージマハルは青味帯び ア
 あれはシヤム猫いえベルシヤ猫 伸
 ひとり居の待つ者もなく出会ひ算 蓉
 連絡船を繋ぐ岸壁 同
 かの地にも爛漫の花咲くと聞く 悠
 炬塞ぎ急ぐ故国の父母 伸
 ナオ コーヒーのアロマに蝶の迷ひこむ ア
 ガラス天井又も破れず 蓉
 先生の鞆の中は空つぽで 全
 溺れてみたき午後の憂鬱 伸
 スキー場コースアウトのアドベンチャー ア
 小型無人機苦手なる雪 伸
 出稼ぎを待ち焦がれるを四畳半 悠
 逢瀬の果はいつも抜けがら ア
 カルメンの赤いスカーフ潮風に 全
 ニホニウムには皆んなびつくり 悠
 笑ひたるやうにも見ゆる今日の月 伸
 哲学堂の色変へぬ松 ア

ナウ 人生は一行の詩秋深し 蓉
 隣りに住むはもしや文士か 悠
 横丁のお稲荷さんに油揚 ア
 夢を託して飾る折鶴 蓉
 名物のからくり時計花に舞ひ 健
 みどりの日には日がな賑はふ 悠
 連衆 若林文伸 棚町未悠 松島アンズ
 五味蓉子

近・現代の連句界と連句誌(下)

東明雅

『国文学 解釈と鑑賞』第六七二号

昭和六十二(一九八七)年五月刊より転載

④(昭和初年より昭和四十五年ごろまで)

この時代に入ると、日本人は漸く連句の衰退に不安を感じたらしい。また、「ホトトギス」その他のいわゆる新派について行けない人たちは、独自の立場から研究と実作を行なった。榎山梓月（まきづき）は旧号江戸庵庭後（あざな）と言ひ、若い頃、其角堂機（あき）一に学んだ江戸の風流人である。彼は慶応大学の出身で、日本橋の大問屋の主人。高浜虚子から俳書堂を譲り受け、大正十五年十月「連句入門」を出版したが、これは殆んど昭和の初めと言つてよいだろう。彼の実作は、昭和二十七年に出した独吟歌仙三十一巻を収めた「古反故」に、必み必みとした情趣と、その人柄を見ることが出来る。

学者の間にも、昭和三年四月、佐々醒雪の「連俳史論」、昭和四年三月から山田孝雄・阿部次郎・小牧健夫・村岡典嗣・太田正雄・小宮豊隆・土居光知・岡崎義恵らの東北大学の教授たちによる「芭蕉誹諧研究」が出版され、五年二月「続芭蕉誹諧研究」、六年二月「続続芭蕉誹諧研究」

が出て、さらに八年一月「新続芭蕉誹諧研究」が出版された。山田らはすべて専門家ではないが、それぞれの深い学殖から出る発言には注目すべき点が多い。また、東京大学物理学教授の寺田寅彦による「連句雑俎」が「洪柿」に発表されたのが、昭和六年十二月のことであった。この中で寅彦(寅日子)は、モンタージュとか、シンフォニーとか、新しい西洋の芸術になぞらえて連句を説き、多くの人の連句に対する関心をよびおこし、興味を満足させるとともに、松根東洋城・小宮豊隆(蓬里雨)とともに歌仙を巻き、また、新三つ物・俳諧六つ物二つ折・TORSOなどの新しい形式を考案・創作して、新しい連句の一方向を指示した。そして、この寅彦の論は、東京教育大学教授能勢朝次によって、さらに精緻な論として、「連句芸術の性格」(昭和十八年八月刊)が誕生することになる。

この間、実作としては、昭和五年に勝峯晋風が「六十二・六」の形式を新連句として俳誌「黄橙」に連載、宣伝したのをはじめ、春秋庵準一による「連句の実際指導」が刊行されたのは昭和七年三月であった。さらに、昭和六年六月には天野雨山によって、「昭和連句総覧」が刊行され、同八年九月にはその続編として「昭和連句総覧第二編」が刊行された。何れも当時生存していた連句人の作品を網羅したもので、ことに第二編には、その名簿があり、当時の有力な三百三十余人の連句人の氏名と住所を知悉できるのは幸いである。

連句の雑誌も、伊藤松宇の「にひはり」を継承した勝峯晋風の「黄橙」が大正十五年一月創刊され、連句の新形式の提唱、明治俳諧史、俳諧鑑賞に特色を見せ、天野雨山の「蕉風」は昭和二年七月創刊、伊藤松宇は別に「筑波」を同三年四月創刊。鶴沢四丁の「俳諧」が同七年七月から、宇田零雨の「草茎」が同十年十一月から、そして、高浜年尾の「誹諧」が同十三年四月から、それぞれ創刊され、作品集としても、昭和十二年一月、中村竹邨・根津芦丈・増田龍雨の三吟歌仙を取めた「下蔭三吟」など、当時としては新しい名品と呼ばれたものが生まれた。

しかし、一方、昭和三年には瀬川露城・同六年に西尾其桃・七年に花の本聴秋・八年に其角堂機一・九年に贅川他石・増田龍雨などの名手が没し、十年には寺田寅彦(寅日子)・同十五年には国の元老でしかも連句を愛好し不読と号した西園寺公望が没して、明治初年からの有名な連句作家が、櫛の歯が欠けるように没して淋しくなるとともに、社会は軍国主義の嵐が次第に激しくなつて、風流韻事にひたる風潮ではなくなつて行つた。

その証拠には、昭和十七年六月、日本文学報国会が設立され、戦争の波は連句の世界にも及ぶことになる。たまたま、昭和十八年(一九四三)は芭蕉の二百五十年忌にあたり、この会の主催で盛大な記念行事が行なわれた。そして、「昭和俳諧式目」というものがその連句委員会によって作られている。これは常識的な故実、式

目を簡単に整理したまでのものであるが、ともかく、お上の力はここにまで及んだのであった。高浜年尾はこの経過および昭和俳諧の理論と実作とを「俳諧手引」（昭和二十年一月）に書き出版し、また、この連句委員会の常任幹事の一人であった伊東月草にも、「連句大概」（昭和二十一年九月）の著がある。

昭和二十年八月十五日の敗戦を機に、世の中はまた一変した。昭和二十一年十一月号の「世界」に発表された桑原武夫の「第二芸術——現代俳句について」は、いわゆる「俳句第二芸術論」として、日本の短詩の存在価値とその可能性に否定的な見解を示したもので、その対象は現代俳句であったが、当時全盛を誇っていた俳句でさえも否定されたのであったから、ごく一部の愛好者を除き注目する者のなかった連句などは、全く無視され、歯牙にもかけられなかったのも当然である。このような環境の中で、昭和二十四年に天野雨山、二十九年には勝峯晋風が没した。初山梓月も同三十三年に没している。しかし、古草が枯れたあとには、必ず新しい芽が生まれるように、昭和二十二年二月、無名庵主寺崎方堂が「正風」を発刊し、歌仙・百韻の外、二十四調というものを弘めた。橋間石は方堂の弟子であったが、師と訣れて、同二十四年五月に「白燕」を創刊。以後連句の啓蒙と指導にあたっている。さらに岡本春人は同二十二年より誌上句会の形式による小冊子「通信かつらぎ」を創刊、俳句と歌仙・短連句の批評を行なって来たが、現在の名称は「連句かつらぎ」

である。さらに幸田露伴は芭蕉の評釈を古くより始め、大正九年から断続して二十八年間に及び、完成したのは昭和二十二年三月、彼の死の約五か月前であった。一代の碩学の畢生の大業というべきである。特に連句の評釈だけをまとめた「露伴評釈芭蕉七部集」は昭和三十一年一月刊行されたが、流石に暢達な文章と博引傍証いたるなき注解とは、一般の読者にも愛読され、この露伴の評釈によって新しく連句に興味を感じるようになった人も多い。

昭和も三十年代に入ると、連句界の様相も変わり、やや活気を帯びてくる。尤も前に述べたように、昭和三十三年四月に初山梓月が没し、同三十四年四月に高浜虚子、同三十八年十二月に寺崎方堂、同三十九年十月に松根東洋城が没したが、孤高の梓月を除いては、みなその門弟があとを引き受け、虚子のあととは年尾をはじめ、阿波野青畝・深川正一郎・真下喜太郎・山路閑古などが健在であったし、方堂のあととは美濃豊月が守り、東洋城のあととは野村喜舟・小笠原樹々・上甲坪谷らに分かれたが、それぞれ活発に動き出した。

根津芦丈は八木芹舎の孫弟子に当る。二十一歳の時から馬場凌冬の門に入って連句に励み、昭和三十四年には既に八十六歳の高齢であったが、連句復興の意気に燃え、その時結成された東京の都心連句会（清水瓢左・野村牛耳・大林柚平・三井武翁・田村無径ら）の指導者となった。芦丈は橘田春湖——松永蝸堂とながれて来た抱虚庵の三世でもある。また、彼は昭和三十六年、

信州大学において講演及び実作指導をなし、その後、信州大学連句会が結成され、四十二年四月まで毎月出張して指導した。メンバーは学長池田魚魯をはじめ、東明雅・高橋玄一郎・小出きよみなどである。

宇田零雨は京都大学で藤井紫影の指導をうけ、「草茎」を出したことは既に述べたが、彼も連句を復興するため、井本農一（茫亭）池田弥三郎（誰蓑）・暉峻康隆（桐雨）・奥野信太郎（凱南）・木俣修（浮巢）・福田清人（水清）・杉森久英（黄吉）・佐々木久女（柳女）らと青郊連句会を作った。連句集「花筐」（昭和三十六年五月）・「続花筐」（同三十七年四月）を出版している。根津芦丈は同三十六年五月に「この一路」を刊行。三十八年には連句専門誌「山襖」の発行を企画、三十九年一月第一号を刊行した。時まさに齡九十歳。彼は雑誌を編集するのはこれが始めてであった。以後四十二年十一月まで隔月刊行したがその意志と気力の強さには感嘆の外ない。彼こそ最後の俳諧師といふべきであろう。

話はやや遡るが、芦丈の伊勢派と、並び称される美濃派は、永く以哉派と再和派に分れていたが、大正二年紅梅園長屋其磐は以哉派二十二世を継ぎ、門弟千余人に及んだという。その弟子森桂園は二十八世を襲ぎ、大正八年七月「獅子吼」を創刊した。その後両派の統一が度々企画されたものの、結局昭和四十八年三月、合同が成立し、それ以後は美濃派一本の俳諧誌として現在も第三十九世道統国島十雨を中心に活躍

している。

昭和四十年代には、連句に関する本が続々と登場した。まず四十年には、東洋城門下の小笠原樹々の「連句といふもの」が刊行され続いて十二月阿部正美の「芭蕉連句抄」が発刊された（これは昭和六十一年に第九巻までに達している）。同時に都心連句会の作品集「艸上の虹」も上梓された。昭和四十三年十二月には藤田英白の「現代連句集」、同四十四年三月には都心連句会の第二集「むれ鯨」が出版されている。

④（昭和四十五年ごろより今日まで）

昭和四十五年ごろになると、例の「連句非文学論」の迷妄は破られ、鑑賞・実作する者の数が飛躍的に伸びた。この年をもって新しい連句元年と見る人もいるくらいである（大畑健治・国文学 解釈と鑑賞 昭和五十八年二月号）。

それは外的的の二要因が一致したからである。先ず外的には昭和四十五年六月創刊の雑誌「すばる」に詩人安東次男の「芭蕉七部集評釈」が、斬新な文体で連載され出し、多くの愛読者を生んだことであり、内的には同年四月、松本市で芦丈三回忌が催され、全国の著名の連句人が集まって、昭和の連句復興が叫ばれ、氣勢が一時に盛り上ったことによる。この内外二つの要因が相乗効果を発揮することになった。芦丈の追善集「芋日記」は九月刊行されている。

しかし、本来の意味で、連句の全国大会が開催されたのは、昭和四十六年十月、青山の料

亭「いろは」で第一回俳諧時雨忌が挙行されたのを以て嚆矢とすべきであろう。この時集る者二十八名。それでもすべてめでたく満尾したのは、影になって努力した大場勝一・杉内徒司の力によるものである。なお、この時雨忌は今日まで続き、今年は八十数名の盛況であった。

そのような雰囲気の中、連句関係の出版が続いた。昭和四十七年九月、東明雅の作品集「夏の日」、同四十八年四月に清水瓢左の「この一年」、同年三月宇田零雨の「独吟歌仙三十一人集」刊、同四十九年二月には鳴立庵主であった山路閑古の「鳴立庵記」と続くが、この間四十九年七月、都心連句会の有力なメンバー野村牛耳が没した。彼は元々小説家であったが、芦丈門でも異彩を放つ新しい存在でその魅力によって、多くの小説家、詩人を弟子にした。その追善集「摩天楼」が昭和五十年七月、門弟たちの手で出版された。

昭和五十年に入ると連句入門書と連句雑誌が相次いで刊行され、まさに連句ブームの到来を思わせた。

まず入門書としては、昭和五十三年には六月山地春眼子の「現代連句入門」、同月林空花の「行々子」、七月東明雅の「連句入門」（中公新書）、十二月小出きよみの「花野」と続き同五十四年には十月清水瓢左らの「連句研究」、同月岡本春人の「連句の魅力」、十二月には近松寿子の「連句をさぐる」、五十五年には三月、今泉宇涯の「連句実作への道」、五月には乾裕幸、白石悌三の「連句への招待」（有斐閣叢書）、十月に馬嶋春樹の

「連句への道」、五十七年五月に井本農一・今泉準一共著の「連句読本」などが出版され、まさに花盛りであった。

これより先、すでに昭和二十五、六年ごろには、連歌、俳諧研究の機運が熟し、「俳文学会」が創設され、二十六年十一月に機関誌として「連歌俳諧研究」が創刊され、連歌と俳諧とに関する、実証的な研究、新資料の紹介が年二回ずつ発刊され、今日までの連歌・俳諧の学問的研究の中心となって来たが、さらに、これを俳諧のみに限定した俳文芸研究会（井本農一・松村友次・堀信夫・久富哲雄・森川昭を同人とする）が、昭和四十八年四月に機関誌「俳文芸」を創刊し、これも年二回続刊されている。主たる論文はやはり古典作家・作品の研究であるが、連句に関するものも多く掲載され、参考になるところが多い。さらに、信州大学連句研究会は、昭和五十一年九月、機関誌「翠道」を創刊し、古典俳諧の研究論文とともに、現代連句の実作も掲載したが、東明雅の停年退職により、第七号までで終わった。なお島居清は「芭蕉連句全註解」全十冊を昭和五十四年より刊行、完成している。

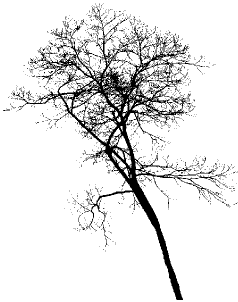
さらに、阿片瓢郎を中心とする連句研究会は、その機関誌として「連句研究」を昭和五十年七月に創刊、主として現代連句実作者を執筆者として、幅広くいろいろな問題を取り上げて、実作も発表し、これは隔月に今日まで六十八号に達している。さらに、わだ・としおを中心とする東京義仲寺連句会は、昭和五十二年一月、作

品とエッセイを中心とした連句専門誌「杏花村」を刊行した。これは先に述べた野村牛耳の遺風を受けているだけに、清新の風を現代連句界に吹きこんだが、惜しいかな昭和六十年四月、通巻百号をもって終刊となった。それを引きつぐ形で、星野石雀を中心とする「摩天楼」が同年五月に創刊され、続刊中であり、わだ・としおは村野夏生とペンネームをかえ、新しく「風信子」をおこして、続刊中である。東明雅は東京の朝日カルチャー・センターの受講生を中心に「季刊連句」を昭和五十八年六月創刊、続刊中で、これも実作とエッセイ、研究が中心である。

その外、暉峻桐雨・草間時彦・鈴木香歩・今泉宇涯・今泉忘機・宇咲冬男・高藤馬山人など

「あがたの森」幻視

鈴木千恵子



川上弘美は、北杜夫が好きで高校生の頃は写真を定期入れにしのぼせていたそうである。高校生の頃の私も、彼の写真を定期入れにしのぼせていた。

そして、高校生の私はどうしても縁の土地を訪れたくて、鈍行列車で日帰り松本行きの旅を

それぞれ活躍し、また都心連句会も昭和五十八年十月「都心連句」を創刊現在まで八号を出している。

昭和五十六年十一月、阿片瓢郎・岡本春人・大林柚平を中心に、全国の連句人を網羅する「連句懇話会」が結成され、会報の発行・全国大会の開催・連句年鑑の作成が計画された。連句の全国大会は既に述べたように、昭和四十年代に始まったが、このような大きな組織の下では初めてである。連句年鑑には、全国連句人名簿(約二千五百人)・全国グループ(約九〇グループ)概況の外に、論考・エッセイ・連句懇話会賞の発表などがあり、年々その内容も充実して来ている。

計画した。

駅は改築前の姿で、揮毫木彫の「松本驛」の表札は駅玄関に掲げられていた。烏城ともいわれるお城の威容を目の当たりにして感動した。最も憧れていた旧制松本高校は、信州大学の移転後、まだあがたの森文化会館としては開館しておらず、入口の外から背伸びをして覗いていたように記憶している。

数年後、私は連句と出会う。

明雅先生はなんと、北杜夫が松本高校で卓球部の主将をしていたときの顧問でいらした。先生の叙勲祝賀会とき、北杜夫が出席するかもしれないと聞いて、私はずっとときどきしてい

以上の連句専門誌外、俳誌の中にも連句を取り入れるものが多くなり、「あした」・「かびれ」・「草茎」・「獅子吼」・「白燕」・「洪柿」・「さざなみ」・「丹想」・「句と連句」などがあるが、芭蕉以来の文芸性を、いかに現生活にマッチさせ新しみを出すか、そこにみな苦心しているわけである。というのは、昔に比して女流連句人の圧倒的な進出、現代生活の忙しさによる歌仙形式の再検討など、問題は多い。

なお、外国人との連詩の問題もある。これもいろいろな形で行なわれているが、大岡信のいうように古典的様式を變形すれば、おもしろい作品の生まれ出る可能性もあるのではなからうか。(敬称略 前半は前号に掲載)

た。結局、その姿は現れなかったけれども。当日満尾した付廻し祝賀歌仙が残っていて、世話役の杉内徒司さんが尽力してくださったことがわかる。その表六句。

高々と東へ向けて初国旗	井本農一
年あけ祝す雅楽莊重	杉内徒司
頼母しき砕氷船の順風に	宮坂静生
のたりのたりと鯨潮吹く	高藤馬山人
有明に「月よりの使者」読み返す	入江たか子
淡き日さして秋は来むかふ	北杜夫

蛇足めくけれども、発句にはもちろん先生の お名前が詠みこまれている。脇の「年あけ」「雅



「あがたの森」入口。Wikimedia Commons:Agata-no-mori parkより

楽」も同様。連句と出会って日の浅かった私は、祝意を込めるといふのは、こういうことなのだ」と学んだ。

それから数十年、話は「明雅先生の古典籍」幻視へとつながる。昨年の秋、近世文学会大会の終了後、閻小妹さんの運転で木越治・秀子夫妻と一緒にあがたの森へ向かった。

あがたの森文化会館は、ヒマラヤ杉に囲まれた洋風木造建築である。武井雅子さんから、先生の研究室は二階の一番奥だったと伺っていた

ので、玄関ホールから正面階段を上がり、右手へ急ぐ。かつての研究室は、会議室となっていた。ベージュとグレーの落ち着いた色調のドアの前で感慨に耽り、しばらく立ち尽くす。その後、もう一度一階に向かう。和硝子なのだろうが、踊り場の明り窓は少し歪んでいるようだった。外の紅葉が美しい。

閻小妹さんと信州のスキーを楽しみ、信大の官舎に泊めてもらったことは何度もあったけれども、ここに立ち寄ったのは初めてだった。あがたの森（旧制松本高校）はずっと訪れたことがたはずの、人生の忘れ物だった。訪れることができたのは、明雅先生の古典籍のお陰だ。この時点で、私の今の憧憬の対象は北杜夫というよりも明雅先生なのだと気づく。

また突然に、ああ私はあがたの森（信大旧校舎）を二村文人さんに案内してほしかったのだ、と気づく。そう思ったのは、いつも心に残っていた言葉があったからだ。

二村さんが急逝された一か月後に、五十嵐讓介さんから手紙を受け取った。それによると二村さんは亡くなる前日の六月十日、信大の同級生にメールを出したそうである。讓介さんの手紙とは……「その内容は、九日九時放送のBS-TBS吉田類『酒場放浪記』で松本の居酒屋『とり八』を紹介しているのを見て、かつて板場を仕切っていた兄さんが今では爺さんになつていたと懐しんだものでした。そしてその最後の言葉が『ああ、青春の城下町』だったそうです。我々同級生にとっては泣けてきます」。東京の大学

で近世文学の後輩だった我々が読んでも、泣けてきた。

松本とは……。旧制松本高校のあった土地。明雅先生が二村文人さんや五十嵐讓介さんと出会い、連句を伝えられた土地。私にとっては高校時代に漠然と「文学」、表現するということに憧れていた頃に縁の深かった地。俳諧の兄の二村さんの青春の地。ということは、現在の自分が形成されるのに切っても切れない地なのだ、ということを見つけたあがたの森行きであった。



旧制松本高校校舎の一部。同上

友朋山荘連句会のこと 木越秀子



私が連句に初めて出会ったのは原村の友朋山荘である。友朋山荘とは鈴木千恵子さんの大学の同窓生で友人である閻えんしやま小妹さんの別荘である。この別荘で夏の恒例として、閻さんや千恵子さんの恩師である高田衛先生たかだまゑを囲む会もたれている。ある時から、同窓生でもないのに、私もこれにもぐりこませていただいている。

さて、昨年八月初めのこと。友朋山荘にいつもの顔ぶれがそろい、閻さんの手料理を賞味しながら四方山話でひとしきり盛り上がったあと、高田先生が「千恵子さんがいるなら連句をしよう」と言い出された。みなすぐに大賛成。けれども千恵子さんは浮かぬ顔で「私は閻さんの手料理を楽しみにして来ただけなのに……」とつぶやいた。

実はこのときの友朋山荘での連句会は二度目である。

この二年前の集りの食後、高田先生が、「二村先生の追悼のため連句を巻こう」と言い出された。勿論千恵子さんの捌きをあてにしてのことだったが、集っていたのは近世文学を研究している人ばかりで、すぐに食いついた。

私は実は連句については、「五七五」の句に「七七」の句を付け、それにまた「五七五」の句を付け、ということを繰り返す、ここにうるさい決まりがあるらしい、ということぐらいしか知らない。そしてそのときどうも、千恵子さんともうお一人以外は、大方私と同じかそれよりややマシという程度の連句力だったのでなかっただろうか。そういう人々を率いて千恵子さんは捌きをなさったわけだが、今ならそれがどれだけ大変だったか、わかるような気がする。

というのも、昨年十一月、千恵子さんのお誘いで芭蕉記念館の連句会をのぞいたところ、参加を促され、観る阿呆より体験する阿呆と不覚にもまじってしまった。それは友朋山荘ののんびりしたのとは大違い。次々と大波が押し寄せ、私はすぐに溺れそうになる。けれども一座の人々が私に手を差し伸べてくれ、おかげでなんとか向こう岸まで泳ぎつくことができた。

ところが、友朋山荘では波もないのに溺れる人ばかり。「七七」のはずが「五七五」の句を出す人、俳句は写生が大切なはずとフィクションの句に納得しない人、思いがなかなか句にまとまらない人等々。千恵子さんはたったお一人でこれら溺れる人々に一々手を差し伸べ、向こう岸まで泳ぎ着かせようとしたのだった。これは大変なご苦労であったはずだ。しかし、千恵子さんは「閻さんの手料理を……」とつぶやきながらも皆のために連句会を始めてくれた。

最初に発句を皆で出し合った。小短冊に書いて

たを集めて皆にまわし、その裏に「〇」印を書いて投票する。決選投票に高田先生と私の句が残ったのは結構嬉しかった。私のは治療の難しい癌を患う友を思っ作ったものだった。けれど致命的なことに、用語にミスをしてしまった。当然、わかりにくいということで、決選投票では高田先生が一票入れて下さっただけ。発句は高田先生の句が選ばれた。

トンネルを出れば魚飛び滝ありき漢詩の世界のようで勢いがあり、清々しい。これは先生が友朋山荘に向かう途中で体験した実景だそうで、とれたてのキトキト（富山の言葉）の句だ。この句が選ばれるのは当然だし、みな元気になれる。友の癌についての句ではそうはいかない、発句は私小説的でない方がいいかも、私小説的でも皆が元気になれるものの方がいい、なぜなら元気になるために連句という遊びをやるのだから、などと、まだ連句の「れ」の字も知らないけれど、いろいろ考えさせられた。さて、脇に相國（風間誠史氏）さんが付けたのは、次の句だ。

日盛りに往く稜線の道
「稜線」の漢語が先の句の漢詩的世界を引きつぎながら、「日盛り」「稜線」と目線を上に促し、いよいよ格調高くなった。

と、そのあとに千恵さんが次の句を付けた。
電子辞書言葉の森を彷徨ひて

これにはびっくり。世界がころっと変ってしまった。「森」は森でも「言葉の森」、それも「電

「子辞書」の中にある森。そこを「彷徨ひて」というのはとても共感を覚えた。

私は電子辞書の愛好家。

初めての電子辞書は近くにできた大型店のチラシに見つけたサービスマンの五百円のもの。これは全体的におもちゃで、漢字表記を知る以外にちっとも役に立たず、すぐにクビ。グズの私にしては迅速に行動を起こし、その店の家電コーナーをはじめあちこち廻り、かなり小型なのに『広辞苑』を登載したソニーのものを手に入れた。キーを押すたびにピコピコ音が出る初期設定は意味不明。消音モードにし、どこでも、わからない言葉があつたらすぐに調べ、この電子辞書に大いに遊んでもらった。しまいに液晶画面がかすれ、メーカーに修理に出したら無料で直してくれたのを思い出す。途中で主人がもう少し画面の大きいのを買ってくれたが、倍ぐらの重量と嵩なので、なおソニーのものを愛用していた。その画面もかすれ、主人が買ってくれたのを使っている内に『日本国語大辞典』（縮小版）が登載されたものが出、これに切り替えて今に至るが、言葉がなかなか出なくなつた今、とても重宝している。

というわけで、勉強にも遊びにも電子辞書は私の必須アイテムで、その森に遊ぶことしばしば。なので、この句を読んだとき、自分が電子辞書の中に入り、言葉の森で酔っぱらって迷子になつたような不思議な気分になつたのであつた。それで、私は次のような句を付けた。

孫三人と謎々を解く

これは実体験を素直に詠んだもの。「電子辞書……」の句のように脳天をガンと打たれ胸がドキドキするようなのは今の私にはとても詠めないが、でも単純ながらそれほど溺れずに付けることができた、と嬉しく思った。

さて、何句かあつて、高田先生が付けられた。

今業平の颯爽とゆく

次は私の番。「恋」の座だそうで、「業平」とあればこれしかない、と次のように付けた。

負はれてあれは珠かと問はまほし

最初「負われて」と出し、仮名遣の間違いを指摘された。「うむ、まだまだだなあ」と胸の内でも今回もまあまあ立ち泳ぎくらいで溺れずにすんだ自分を誉めていたら、千恵さんが次の句を付けた。

レアなポケモン不意に出現

「珠か」と思つたら「レアなポケモン」だつたというわけだ。まだ「伊勢物語」の世界に浸っていた自分は、全く「不意に」、抵抗しがたい威力で、ポケモンGO大流行の現実世界にワープさせられた。その驚きは快感だつた。ウーム、このような技が使えたら最高。いま連句の「れ」を誉めたばかりなのにこのような高望みとは、我ながら呆れる。が、このワープの快感が私を連句の世界へ引つ張り込もうとする。自分が付けることができなくても、誰かの付けた句でこのラリ感が味わえたらどんなにか楽しいことか。

そしてまた何句かつながら、「花」の座というところで私は次の句を付けた。

花吹雪み仏まねる幼き児

これも大昔の実体験を詠んだものだが、このとき私は前の「七七」を全く意識していなかった。連句の妙味を感じる余裕もなく、ただ「花」というだけで詠んだわけで、私はついに溺れてしまったようだ。が、揚句がこれを救ってくれた。

春の背中にランドセル跳ね

瀬女（閨小妹）さんありがとう。とつてもとつてもいい。子供らが幸せに向かつて一散に駆けて行く。終わりよければすべてよし、である。

後日、千恵子さんからメールで、このときの句を整理したものが届いた。「半歌仙『魚飛ぶ滝』の巻」と命名されていた。今読み返すと、この半歌仙、なかなか面白い。そのときの濃い時間も思い出される。「半歌仙『魚飛ぶ滝』の巻」（次ページ参照）は私の宝物のひとつとなつた。千恵子さんのおかげだ。

ところでこの『猫蓑通信』の愛読者はご存じかもしれないが、「千雪」さんは鈴木千恵子さんである。私は鈴木千恵子さんに連句にお誘いを受けたのだから、このことを心から嬉しく思っている。

なお、友朋山荘での半歌仙を巻き終つたあと、高田先生が「この連句会を恒例にしよう」とおっしゃったことをここに書き添えておきたい。この楽しい連句会ができるだけ長く続きますように。

木越秀子●主婦。近世小説研究中。論文『『秀句冊』第三篇と『酒色財氣』』『読本研究新集』第七集』など。

半歌仙「魚飛ぶ滝」

鈴木千雪 捌

トンネルを出れば魚飛ぶ滝ありき

衛翁

日盛りに往く稜線の道

相國

電子辞書言葉の森を彷徨ひて

千雪

孫三人と謎々を解く

秀葉

夕月夜ヒップホップも軽やかに

三七丸

どぶろく舐めてふらふらの猫

瀬女

ウ 草の穂に戯れてゐるふたり連れ

國

今業平の颯爽とゆく

翁

負はれてあれは珠かと問はまほし

葉

レアなポケモン不意に出現

雪

下蔭三吟（上）

増田竜雨 根津芦丈 中村竹邨

本号収録の、東明雅先生の「近・現代の連句界と連句誌」後半は、昭和初年から始まる。『下蔭三吟』は、その時代、昭和初年から十年ころまでの連句の代表的な作品集の一つとして知られる。はじめに刊行されたのは昭和十二年だが、ここでは昭和三十六年刊、根津芦丈師の『連句集 この一路』（甲陽書房）末尾に再録されたものを底本として収録した。今号に序文と二歌仙、次号に三歌仙と跋文を収録する。増田龍雨（竜雨）、根津芦丈、中村竹邨、序文を寄せた初山梓月（はつやま しばづき）は、みな右の明雅先生の文章に登場し、今号6ページ下段には『下蔭三吟』についても「当時としては新しい名品」と言及されている。根津芦丈は、言うまでもなく、猫藪会創始者東明

わが庭になめくぢも来る人も来る

女

鼓門前（つづみもん）フラッパにぎやか

丸

鱈（たら）ちりに故郷ゆかし寒の月

翁

釣り糸垂らしうたた寝の夢

國

つば広き帽子にルアーあしらつて

雪

殿様蛙ゆらめいて立つ

丸

花吹雪み仏まねる幼き児

葉

春の背中にランドセル跳ね

女

平成二十六年八月某日 首尾

於 有朋山莊

雅先生の連句の師。明治七年に長野県伊那に生まれ、昭和四十三年に九十五歳で没した。中村竹邨は群馬県高崎在住、昭和二十年に没した俳人。増田龍雨は、蕉門十哲の一人服部風雪の創始した雪中庵の十二世を継いだ俳人。久保田万太郎の小説『市井人うしろかげ』に登場する「旦暮庵十二世蓬里先生」のモデルと言われ、万太郎との交友が知られる。「旧派」の系統に属しながら、俳句でも新派の有名俳人に伍する力を持つ俳人として知られ、多くの名句を残した。根津芦丈と同じ明治七年、京都に生まれ、東京浅草に在住。『下蔭三吟』の第五歌仙が初折裏に入つた昭和九年十二月に病没した。芦丈、竹邨による跋文には、これが歌仙十巻をめざして始められたと記される。序文、跋文を含め、三人とその周辺の友情、二人の龍雨への哀悼の情が滲むことも、作品に魅力を加えている。『連句集 この一路』では「龍雨」が「竜雨」となっているように、昭和三十年代の出版物らしく漢字の

新旧が混在している。昭和十二年の『下蔭三吟』刊行当時の表記と異なる可能性があるが『連句集 この一路』に従った。ルビは編者の判断で補った。ウ・ナオ・ナウの表記も原典にはない。各歌仙には題もないので仮に「第一歌仙」等とした。（編集子）

下蔭三吟引

ここに下蔭の三吟とて、竜雨芦丈竹邨三家おのしその風懐をつくされたる五歌仙あり。三家はとしころむつびあへる吟友なりとぞきこえし。此の五歌仙を下かげとなづけたるは、すすき木かげにまどぬして、好友互にその風流をつくすとのころなるべくや。

三家のうち竜雨はやく世を辞して昭和九年十二月といふにむなしくなりぬれば、そのとし十月におこしたりといふなる、第五の歌仙にはただ三句の附句を見るのみなり。その初裏の第三句こそおそらくは雨が附句の最後の作にてやありけむと、そぞろ涙をさそはれ侍り。

五歌仙を見もてゆくに、第一の歌仙よりも第二の歌仙おもしろく、第二の歌仙よりも第三の歌仙なつかしく、第三の歌仙よりも第四の歌仙さらにかし。三家応酬の意気としとともに、醇熟し来れるあとをうかがひるべきなり。かくて第五の歌仙は竜雨おほくこれにあつたらざれば、むねと丈邨二家が風雅のたましひをさぐるよろしきひと巻とはなりけらし。そはとまれかくまれこの下蔭三吟こそわがためにはまたいといとうなつかしき俳諧集なれ。およそ亡友の

遺吟をその歿後に於いて見るばかりわりなきお
もひせらるるはなし。発句においてしかなり。
まいて附句においてをや。

昭和丙子のとし童雨居士が大祥の忌もきの
ふに過ぎぬる師走の日、みだりに筆を巻首
に加ふるものは

扇谷隠士 梓月なり

第一歌仙

大木のおよそ涼しき細枝かな

童雨

清水さらさら岩はしる音

芦丈

果しなき長途の草鞋踏みしめて

竹郎

ちびたる筆に文字のかするる

雨

夕けぶり月のおもてに立昇り

丈

露ゆりこぼすもとあらの萩

郎

冷やかに逆髪祭すみにける

雨

わら家の窓に行く雲を見て

丈

枯草にかかる涙のほひなく

郎

二通の状に石上の霜

雨

彼一語彼女の一語綿々と

丈

月下にくらき童燈の松

郎

漁船を皆引きあげし雁渡し

雨

鹿児島汁の鍋かこみ酌む

丈

板垣は死すとも自由は死なずとよ

郎

聳えて高き稲葉山かな

雨

屎鷲の花の大空かけめぐり

丈

鐘もきこえず霞む一ト時

郎

ナオ 蓮如忌の法話の中の軍人

雨

眼に鈍き蠟燭の照り
貫ひしが呑みもせざりしカルモチン
とけしをむざと結ぶ片糸

人伝にはかなき思ひかくるらん
汲めども汲めども滄しげき船
葉柳に長雨あがる日のけしき

御陵閑かに奈良坂の蟬

郎

鞆持一人うしろにひかへ居り

丈

昔の姓を呼ぶ人は誰ぞ

雨

月傾き簷ふけ夜坐のあら筵

郎

そぞろに寒き狸のくつさめ

丈

ナウ 袋洗ひ猪名川と云ふ銘もあれ

雨

かながきの詩人破顔一笑

郎

さりげなく賜りものをうち棄てて

丈

厠の広さゆたかなりけり

雨

まなかひの岬の花に灯のともし

郎

朧々に千鳥海猫

丈

昭七、三、満尾

第二歌仙

故郷にかへりて

懐しのあの山この山雪のこる

芦丈

あけぼのぬき一筋の雲

竹郎

春浅く汁の蜆の香に立ちて

童雨

宿の借衣のあふもをかしき

丈

ちりぎはの又なく細き二日月

郎

汐風強き道の掛稲

雨

ウ 秋寒く齋火のかまどうちこぼち

丈

酒にかくれし衛士のよろぼひ
室町の天下も末の茶三昧
古葉ふるうて枝鳴らす松

氣を吐いて蜥蜴にげたる花茨
紅に浅黄に二ツ笠の緒
手をとりに踊るころの嬉しきは

月は薄かれ今日の星合

郎

鈴虫は蒔絵の萩の露恋うて

雨

かしき姿のいみじくもある

丈

回らせし輓に落花片々と

郎

高き鳥居に高き陽炎

雨

ナオ 竜天に昇る日湖に波もなし

丈

理学博士か釣の博士か

雨

一着の背広を藝にも晴衣にも

郎

金山おろし誰も寒がる

丈

極月の夕焼空を旅がらす

雨

なげの情にすがる拙さ

郎

無理酒をとめし従妹も今はなし

丈

吾が手にもどる三戸前の土蔵

雨

堀割つて舟引き入るる小名木川

郎

地をすする柳ちりもはじめず

丈

灰で縛ふ縄の故事おもふ月

雨

茶の点心は小菜の新漬

郎

ナウ 海少し木の間に庭の秋澄みて

丈

御剃刀を今日ぞいたたく

雨

捨てし子は熊野の社家の後を嗣ぎ

郎

尊き連哥を読み上げにけり

丈

花桜とぶさもたわに咲きすすみ

雨

飛ぶ鳥かげを落とす若草

郎

昭七、十二、

温故知新

18… シェイクスピアは文学していたか

「これは文学か」とは、シェイクスピアの関心から最も遠い問題だったに違いありません。ボブ・ディラン『謝辞』二〇一六年十二月

ボブ・ディランは、年間百回前後のステージをこなす現役のロックスターで、「新」はともかく「故」にはあまりふさわしくないと見えるかもしれない。しかし、ノーベル文学賞受賞への謝辞の内容は「温故知新」そのものだ。「文学」は特権的なものではなく、創作全体の一部にすぎないこと、少人数の聴衆の前でこそ深い伝達力を問われること、など、創作の現場の人ならではの貴重な洞察を含んでいる。当時新聞等に掲載された訳文の中には、ディランの意図を取り違えた明らかな誤訳を含むものもあったので、肝心な部分を以下に改めて訳出してみた。読んでいただければ、これ以上の解説は不要だろう。

(前略)ノーベル文学賞受賞という驚くべきニュースが届いたとき、ロード(コンサートツアー)の最終だったので、ニュースの意味を飲み込めるまでにかなり時間がかかりました。そのとき思ったのは、文学史上の偉大な存在であるウィリアム・シェイクスピアのことです。シェイクスピアは自分を劇作家だと考えていました。彼の頭には、自分の書いているものが文学だという考えは浮かびようがありませんでした。彼の戯曲はステージのために書かれたものです。読まれるのではなく、台詞として語られることが目的でした。『ハムレット』を執筆しながら、

きつとその中身とは別のいろいろなことを考えていたに違いありません。たとえば「この役柄にぴったりの役者は誰だろう」「どんなふうな舞台演出にしようか」「物語の舞台はデンマークという設定で本当によかっただろうか」などなど。創作上のビジョンや野心がシェイクスピアの心の最先端を占めていたことは疑いありませんが、他にも、もつと俗な事柄をいろいろ考えたり処理したりしなければならなかったでしょう。「資金繰りは大丈夫か」「パトロン達のための良い席は十分に確保できているか」「舞台で使う頭蓋骨を、どこでどう手に入れたものだろうか」といった具合に。賭けてもいいですが「これは文学か」とは、シェイクスピアの関心から最も遠い問題だったに違いありません。

ティーンエイジャーとして歌を書き始めた頃、さらに多少は名を知られるようになってからでさえ、私はそれらの歌についてさほど大それた望みは持っていませんでした。コーヒーハウスやバーで聴いてもらえたらいいな。もしかしたら、いずれはカーネギーホールやロンドン・パラディウム劇場のようなところでも、もう少し大きく出るとしたら、たぶんレコードを出して、それをラジオから聴くことができれば、くらいのことでも想像したかもしれません。もし実現したら、それは私にとって本当たたいへんな賞に値する事柄と思えました。レコードを作り、それがラジオから流れるということは、膨大な数の聴衆に歌が届くということ、そして、自分が始めたことをこれからもずっと続けられそうだ、ということの意味していました。

そう、私は、自分が始めたことを、その後とても長い間続けてきました。何ダースものレコードを出し、世界中で何千回ものコンサートを聞き、演奏してきました。しかし、私がこれまでやってきたほと

んどすべてのことの中に中心にあるのは、私の歌です。私の歌は、多様な文化に属する多くの人々の生活のなかに、その居場所を与えられたように思われます。そのことをとても感謝しています。

しかしながら、一つ、どうしても言っておきたいことがあります。パフォーマーとして、これまで五万人を前に演奏したこともあり、五十人のために演奏したこともありませんが、五十人のために演奏するほうがずっと難しいのです。五万人の人々は一纏めの全体として一つの人格ですが、五十人はそうではありません。五十人を構成する人々は、個々に独自のアイデンティティを持ち、それぞれ自分の世界を持っています。一人一人、物事をより明確に理解できるのです。そういう場では、演奏家の誠意や、その誠意がどのくらいその才能の深みと繋がっているか、ということが問われるのです。ですから、ノーベル賞選考委員会がとて少人数だということの意味を、私はよく理解できます。

しかし、シェイクスピアと同じように、私も創造的な追求のかたわら、実生活上の雑多なあれこれ、「この曲にはどのミュージシャンがベストか」「このスタジオでレコーディングするのは正しい選択か」「この歌のキーはこれでいいか」といった事柄にしばしば煩わされています。四百年経っても、変わらないものは変わらないのです。

私も「私の歌は文学だろうか」などと自問している余裕はこれまで全くありませんでした。ですから、正にその問題をじっくり考えて下さったこと、そして最終的に、こんな素晴らしい答えを出して下さったことについて、スウェーデン・アカデミーに深く感謝します。

皆様のご健勝を祈ります。

ボブ・ディラン

●第百四十回例会（平成二十九年初懐紙）が開催されました

一月二十二日（日曜日）、ホテルグランドヒル市ヶ谷にて、第百四十回例会（平成二十九年初懐紙）が開催されました。八卓に分かれて歌仙を興行しました。当日の歌仙はP2～P5に掲載しています。途中、根津忠史丈より、先師根津芦丈翁八十三歳の折の色紙をご披露いただきました。



談古頼より壇の
浦を見おろして
春屋鳴
哀れハ
永久ニ
美しき
八十三叟 芦丈

●第百四十一回例会（平成二十九年藤祭）が開催されました

四月二十六日（水曜日）、亀戸天神社にて、第百四十一回例会（平成二十九年藤祭）が開催されました。亀戸天神藤祭奉納正式俳諧二十韻を神楽殿にて公開興行した後、八卓に分かれて二十韻を実作しました。正式俳諧二十韻一卷と実作会二十韻八巻は、各々懐紙に清書の後、五月二十四日、亀戸天神社正殿にてお浄めの後奉納され、永久保存となりました。詳細は次号にて。

●今後の予定
・第二十七回猫養同人会総会

六月二十五日（日曜日）
歌仙実作 於 新宿ワシントンホテル新館
十一時～十七時（受付十時半より）

・第百四十二回例会 猫養会総会

七月十九日（水曜日）

歌仙実作 於 江東区芭蕉記念館

・第百四十三回例会 芭蕉忌・明雅忌

十月十九日（木曜日）

芭蕉忌正式俳諧興行

源心実作 於 江東区芭蕉記念館

●猫養作品集第二十三号を刊行します

十月頃を目処に、猫養作品集第二十三号を刊行します。猫養会員は各自揃えた作品を一人について一巻掲載することができます。前号の刊行が平成二十五年だったので、その後の作品を吟味し精選して、ふるってご応募下さい。

・締切は六月末日、応募料は二千元（作品集一冊の代金込み）です。

・二十一号、二十二号に添えていた留書は取りやめ、作品自体の質向上に集中することとしました。詳細は、今号の会員宛分に同封する募集要項を参照して下さい。

●猫養作品集バックナンバー

・猫養作品集の第十五号以前のバックナンバーで在庫のあるものにつき、希望者に無料で進呈します。
・二、五、八、十、十五の各号です。猫養作品集バックナンバー希望と明記のうえ、希望の号、住所氏名を明記し、青木秀樹宛にFAXにてお申し込み下さい（03・3309・0953）。送料着払い

の宅配便にてお送りします。残部数は号によって異なります。各号先着順で、残部が無くなり次第打ち切りとします。

●猫養基金にご協力ありがとうございます

・佛淵雀羅様 平成二十九年一月 一万円
・大谷似智子様 平成二十九年一月 二千元
・草本美沙様 平成二十九年三月 二万円
・聖成美智子様・ご友人様 平成二十九年四月 一万円
・小林香那子様 平成二十九年五月 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●猫養会にご入会下さい

・年会費二千元 入会金なし

●新入会員

・市橋章子 平成二十九年一月入会
・木越秀子 平成二十九年二月入会
・聖成美智子 平成二十九年四月入会

季刊 『猫養通信』第百七号

平成二十九年五月三十一日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182・0003

東京都調布市若葉町2・21・16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社